

---

# 犯人は・・・

槻乃

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

犯人は・・・

### 【Nコード】

N7295Q

### 【作者名】

槻乃

### 【あらすじ】

どんな依頼でも必ず遂行させてきた殺し屋のツキ。女教師深雪の依頼を叶えたことから彼の生活は変わり始める。

## はじまりの事件（前書き）

プロローグみたいなものです。

## はじまりの事件

赤い赤いモノが夜の暗闇で嘔き出した。

嫌な鉄の匂いがひろがり、うめき声が聞こえる。

「任務完了」

ぼそつと呟く声がした。声を刺した主は携帯を取り出すと迷わずあの番号をうち電話をかけた。

「ツキだ。動物公園東の通り」

それだけ言つと携帯をしまい、その場・死体のそばからそつと立ち去った。

翌日の太陽が真上に上がったころ、ある古いぼろぼろのアパートで一人の青年が目を覚ました。

「んー・・・よく寝た」

寝癖でぼさぼさの紙をなおしながら思いっきり背伸びをした。

「12時か・・・学校・・・」

そつぼやきながら壁を見た。そこにあるのは紺色のブレザー。

そう、青年・・・いやまだ少年といえる顔つきのこの子は高校生。今日は平日で明らかに学校には遅刻だ。

「仕方ない・・・ああ」

溜息をつきながら他のものに目をうつす。パソコンにメールが届いていた。

15時 修佐高校 屋上

今は12時。修佐高校は少年の通う学校だ。

「さばれないな・・・、今からなら午後の授業には間に合うか」

少年は面倒くさそうにおきあがると、制服に着替えアパートを出た。

「今ごろ登校かよ、もう昼休みだぞ」

教室に入るなり近くにいたクラスメイトが話しかけてきた。

「ああ・・・」

「寝癖つきまくりだぞ」

「今起きた・・・」

「遅いつて」

その声をかけられながら席につくと、チャイムがなり午後の授業が始まった。

ホームルームが終わって少年は教室からすぐに姿を消した。

向かった先はメールの指示する屋上。

ここの屋上は当たり前だが立ち入り禁止でドアにももちろん鍵はかかっていた。

「さて」

一つ溜息をついてポケットから特殊な形の針金を取り出した。

カチャカチャと鍵をためらいもなく開けた。

「あの・・・」

屋上に入って中央まで歩いた時、後ろから呼び止められた。

ボタンとドアが閉まるのを聞いて少年は振り返る。

「何ですか、深雪先生」

そこに立っていたのは20代の女性。学校では結構人気のある女教師だ。

「何かご用ですか？なぜここに？」

「あ・・・」

「はあ・・・」

また溜息をついて、女教師の目をじっと見つめて言った。

「卑しきもの、賤しきものに・・・」

すると深雪は恐る恐る言葉を紡いだ。

「制裁を」

「苦しむものに・・・」

「安らぎを」

少年と深雪は交互にそう言った。

「じゃあ、本題に入りましょうか」

「え？」

「えって・・・わかって合言葉を言ったんじゃないですか？」

「なら・・・あなたが」

「はい」

深雪は驚き、少年は淡々と答えた。

「ブライト社、掃除係です」

「か・・・」

「しっ・・・名前は呼ばないで」

少年はさっと深雪の後ろに回り口を塞いでいた。

「仕事の名前はツキっていいいます。」

「ツキ・・・」

「はい、それで呼んでください。ちなみに仕事以外で呼んだら殺します」

「・・・わかった」

少年ツキは深雪の返事にうなずき少し笑った。

「では、本題に入ってもいいですね」

ツキは深雪の正面に回った。

「ええ・・・」

そして彼女は話し出した。

要約すると話はこうだ。

数年前に付き合っていた彼氏と偶然再会したそうだ。そして急に  
りを戻そうと言ってきた。

今、新しい彼氏もいるため断ると、ストーカー行為を始めたそうだ。  
しかも、男を別れた原因は暴力であり、今も生活を壊そうとしてい  
る。

「で、男をどうして欲しいんですか？」

「・・・」

「質問を変えます、男にどうなって欲しいんですか？」

すると深雪は静かに言った。

「消えてほしい」

「・・・」

「あいつがいると私の生活はどんどん壊れてしまう、やっと手に入  
れた幸せを・・・！だからこの世から消えてほしい。あいつの存在は  
迷惑なのよ！！」

深雪は苦しそうに叫んだ。

「わかりました」

「え・・・」

ツキの返事に深雪は驚く。

「わかりましたよ。先生の元彼を消せばいいんですよね」

「そうよ」

するとツキは携帯を出した。

「携帯は禁止って言うのは目をつぶってくださいね」

修佐高校は携帯持ち込み禁止。

「依頼確認です」

電話がつながるとツキはしゃべり始めた。

「ツキです・・・はい、依頼は男の・・・はい、そうです。日付ですか？・・・あー・・・はい。わかりました。では」

携帯を切ると深雪をみた。

「今週の日曜日に依頼を実行します。料金ですが300万円です」

「300・・・」

「300万は一気に支払ってもらいます、分割はありません」

貯金でぎりぎり払えますよね、と付け加えた。

「期限は実行から1週間以内」

ツキの言葉に深雪は考え込む。

「・・・わかった」

深雪は悩みながらも決心したように答えた。

「わかりました」

すると少しツキは表情を緩めた。

「依頼成立ですね、失敗したらお金は結構です。では、この契約書にサインと血判をお願いします」

そして契約書は作成された。

日曜日、今日までにキャンセルはなかった。

「仕事開始・・・かな」

ツキは準備を整えアパートを出た。

時間は昼過ぎ、町を歩き回って男を探した。

みつけた・・・



そのまま男を尾行した。すると、夕方男は深雪のマンションの方へ向かった。

「すみません」

ツキは男に近づき話しかけた。

「少しついてきてもらえませんか、ある人が待っています」

「は？」

「そのマンションに住む女性です。あなたに話があるそうなんですけど・・・」

「どこだ」

男は深雪のことだろうとわかったのか話しに食いついてきた。もちろん・・・嘘だ。

「晴舞神社です」

この先にある神社の名前を言った。

「ふっ」

男はにやりと笑って歩き出した。

神社に着いた。もちろん誰もいない。

「お前・・・」

男が振り返る。

「暗くなりましたねー・・・」

ツキは周りを見渡す。

「おい！」

男はツキにつかみかかろうとして・・・地面に投げ飛ばされた。

「うっ！！」

「さて・・・始めましょうか」

ツキはそう言うとナイフを取り出した。

「は？」

男の様子に関係なくツキはナイフを構え、走った。

次の瞬間には男の腕から血が流れ出していた。

「ぎゃあああ!!」

それに続いて、腹、背中、足と血は止まらない。

「な・・・何で・・・」

「依頼です。苦しんで・・・死んでください」

ツキは傷口を蹴り上げた。

「た・・・たすけ・・・」

男の言葉に耳を貸すことなくツキは傷つけ続けた。

「う・・・がああ・・・」

動けなくなつたところを仰向きに寝かせると、ツキはまたがって何か所も無表情で刺した。

気絶できていたらどれだけ楽だっただろう。ツキは、急所を外し、気絶できないギリギリの状態を保たせた。

「さあ」

ツキは男が真っ赤に染まつたところで手を止めた。

「伝言です」

「だ・・・れ・・・」

「深雪さんから」

「!!」

「さようなら」

ツキはそれを言うつと首を掻き切った。

そして動かなくなった男をみて携帯を取り出した。

「ツキだ、晴舞神社」

ツキはそれだけ言つて電話を切った。

次の日、ツキは久しぶりに朝から学校に来ていた。

「おはよう」

「・・・珍しいな」

そんなことを言われながら席に着いた。ホームルームが始まり、担

任の話があつた。それも終わると、ツキは教室から出て人を探した。

「深雪先生！」

一枚の紙を取り出す。

「え？」

深雪がその紙を見て静かにうなずいた。

放課後、2人は屋上にいた。

「任務完了です。契約は守ってもらいます」

「わかつたわ」

「それでは1週間以内に現金で俺のところまで持ってきてください」

「ええ」

深雪は覚悟していたように答えた。

「もしも、持ってこなかったらすぐに先生のところに行くんで」

ツキはにっこりと、でも冷たく言った。

「そして、契約の際にも言いましたが・誰か人に話すようなことがあれば殺しますから」

「・・・言わないわよ」

「今は・・・ね」

「どうということ・・・？」

不安そうに深雪が聞く。

「依頼したことが後になって怖くなって人に言ったり、警察に行こうとしたりする人、少なくないんですよ」

「！」

「だから今は・・・ということですよ。わかりました？」

「・・・わかつた」

そしてこれからのことについていろいろ話したあと、最後に深雪が言った。

「最後に教えてくれる？」

「何を？」

「彼を殺した・・・手をかけたのはあなた？」

ツキはためらうことなく簡単に

「そうですよ」

と答えた。

「えつと・・・なんで・・・？」

「はい？」

「何でそういうことをしているの・・・？」

「・・・はあ・・・」

ツキは大きく溜息をついた。

「お金のためですよ。親いませんし、生きるためにはこれしかないんです。殺すことに何も感じませんし」

ツキは反論は聞かないという目で深雪を見た。

「では、そろそろ戻りましょうか」

校内に入るドアを指差した。

「こつちも最後にいいいます」

「？」

「先生の命は俺が握っていると思ってください」

ツキはナイフを深雪に向けた。

「わかりました？」

「ええ・・・」

そう、とツキは言うと共に深雪を帰らせた。

そしてドアを閉め1人屋上に残り小さく呟くのだった。

「確かに手をかけたのは俺だ。でも・・・先生・・・あなたが彼を殺したんですよ・・・」

と。

半年後、修佐高校で飛び降り自殺が起きた。

「だから言ったのに・・・」

少年は誰にも聞こえないように呟く。

携帯のバイブがなり面倒くそうにとった。

「・・・わかりました」

少年は携帯を閉じ、歩き出す。次の依頼主のもとへ。

きっかけ(前書き)

## きっかけ

放課後、学校から出ようとした瞬間に悲鳴が聞こえた。

「キヤー!!!」

「だれか落ちたぞ!!!」

「自殺!?!」

自殺?学校で!?!

そんな言葉が頭をよぎる中、木下明は叫び声のした方向へ走った。

「明!」

「美帆!何があつたんだ?」

人だかりの中に幼馴染みの吉川美帆を見つけると話しかけた。

「飛び降りだつて!」

「自殺!?!誰!?!」

美帆は見えないからわかんないというが、次の瞬間誰かが叫んだ。

「深雪先生だ!!!」

深雪先生・・斎藤深雪。男子も女子も関係なく人気のある女教師の名前だ。

「深雪先生だつて・・」

「うそつ」

深雪だと断定された瞬間に、周りの騒ぎはより大きくなった。

「深雪先生・・?」

明と美帆は思わず顔を見合わせた。

「うそでしょ?」

「そんなわけ・・だつて、先生もうすぐ結婚・・」

結婚する予定だった。幸せそうに笑う深雪の顔が頭の中をよぎる。

「本当だよ」

2人で混乱する中、クラスメイトが大群の中から出てきた。

「悠……」

狩谷悠<sup>かりやゆう</sup>。明のクラスメイトであり親友。

「見たのか？」

「見た」

悠は人だかりの向こうを見た。

「先生は？」

悠は首を振る。

「あれじゃ……生きてるわけない」

「……」

「……行かないほうがいいよ」

明と美帆が見に行こうとするのを止めた。

「見ないほうがいい」

それと同時に気持ち悪くなったらしい生徒が何人か出てきた。

「ほら……」

悠は彼らたちを指差して言う。

「でも……っ」

明は悠の腕を振り切って大群の中に入って行った。

「……先生……」

コンクリートの上には赤い血だまり。

そしてその血だまりの中に、おかしな方向に首や腕が曲がった女がいた。

「うっ……」

吐きそうになるのをこらえ、正面をみる。

「せんせえ……」

「うそだろ……!!」

周りでは泣き崩れる人の声が響いていた。

「なんで……結婚するんじゃないのかよ!!」



ぐつと歯をかみしめる。

「ほらほら！どいて！下がりなさい！！」

騒ぎを聞きつけた教師たちがようやく到着し、生徒を現場から遠ざけ始めた。

警察が到着するとブルーシートに囲まれ、生徒たちは全員追いつけられなかった。

「明、先生だったの・・・？」

少し離れたところで美帆と悠が待っていた。

「顔は・・・見えなかったけど・・・」

正面から落ちたのか、顔は潰れてほとんど誰かわからなかった。

「あの格好は深雪先生だ・・・」

明は悔しそうに話した。

「見ないほういいっていったら？」

真っ青な顔をしている明を心配するように悠が肩をたたいた。

「大丈夫か？」

「・・・大丈夫・・・」

そして明はもう一度、深雪の死体のあった方向を眺めた。

明の顔色が少し良くなると、急に悠は美帆に言った。

「吉川さん、明を頼む」

「え？」

「こんなときに悪いけど・・・俺急用があつてばつがわるそうに言う。」

「うん、わかった」

「本当にごめん」

「悠・・・？」

明が悠を見た。

「お前はさっさと帰って休め」

「・・・わかった・・・」

悠は明が了承するのを確認して、走って校門を抜けた。

「・・・明？帰ろっか」

「そうだな・・・」

美帆は明に話しかけ、2人はゆっくり校門へ向かった。

そして帰りながら明は確信したように言った。

「深雪先生が自殺なんて考えられない」

「・・・そうだね。もうすぐ結婚って言ってたし」

「犯人・・・絶対許さねえ」

「明・・・」

明は手をギュッと握りしめた。

## 犯人探し

女教師の事件は結局自殺で処理された。

「俺さ、深雪先生絶対に自殺じゃないとおもうんだ」  
葬式も終わり、学校も落ち着いてきたころ明は悠に言った。

「なんで？」

「だって、先生結婚するはずだったんだぞ？一ヶ月後・・・」

「そうみたいだな」

割と有名な話だ。

「それなのに今、自殺なんてするか？」

「結婚が嫌になったとか」

「そんなのあり得ないよ・・・」

「明？」

「先生はそんな人じゃない」

「・・・家庭教師だったっけ？」

明の中学1年生の時の家庭教師が深雪だったそうだ。

それから交流はあつたらしく、明はよく深雪になついていた。

「うん、だから深雪先生があんな自殺なんてする人じゃないってよくしってるし、結婚式すごい楽しみにしてたんだ」

「人間何があるかわかんないぜ？いきなり自殺したくなつたとかあるみたいじゃん」

「確かに・・・それもあるかもしれないけど・・・」

「なんだ？」

悠の言葉に少し動揺するも明は言った。

「もしも・・・本当に先生が自殺したいほど悩んでたとするよ」

「ああ」

「でも飛び降りなんかしない。絶対に」

「え？」

「先生は・・・高所恐怖症だ」

「！」

「俺の部屋2階なんだけど絶対に窓とかベランダには近づこうとしなかったし、学校でもできる限り窓には近づいてない。それほど強度の高度恐怖症だったんだ」

「まじ・・・？」

「マジ。学校では隠してたみただけど」

ほとんど学校では知る人のいない話だ。実際、悠も初耳だった。

「だから・・・高いところから飛び降りるなんて不自然すぎるんだよ。自殺するなら・・・手首切ったりとか・・・練炭とかだよ。高い所になんでわざわざ・・・」

高所恐怖症の人が、4階建ての校舎の屋上から飛び降りるのだから不自然も当たり前だ。

「じゃあ、殺人って明はいいいたいのか？」

「・・・わかんないけど・・・少なくとも自殺じゃない。絶対に犯人はいる」

「誰だよ」

「わかるわけねーだろ」

はあ、と溜息をつく。

「だからさー」

明はバンと机をたたいた。

「犯人探そうぜ！」

「・・・は？」

「犯人探ししようっていつてんだよ」

「本気か？」

「本気」

次は悠が溜息をついた。

「はあ・・・たとえば殺人事件だったとしても、そう簡単に犯人が見つ

かるわけないだろ」

「わかつてる、でもこのままじっとしておくのも嫌なんだ。自殺して決められたし・・・」

「明・・・」

「それに、犯人がいるとしたらこの学校の関係者だと思う」  
それには確信しているようだった。

「え？学校関係者？」

「ああ、だって昨日の放課後先生に会ったときに、これから人と会う用事があるって言ってたし、学校を出ていないってなると学校関係者だろ？」

「わかんねえよ？意外と外部の人かも」

「外部の人がわざわざ屋上に呼びだすのか？あそこ鍵かかって立ち入り禁止じゃないか」

「確かに」

「噂によると、鍵は先生が持ってたらしいし」

「じゃあ、先生があけたということか？」

「それもあるけど・・・犯人があけて持たせたっていう可能性もあるだろ？」

「・・・そうだな」

「応明の言うことはおかしくはない。」

「ちなみに、明の言う学校関係者って先生とか？」

「それか事務員とか」

「生徒は？」

「生徒もあり得ると思う」

「容疑者いっぱいいるじゃねえか」

「仕方ないだろ！それ以上はわかんねえんだ！」

「はいはい」

「だから・・・頼む！手伝ってくれ！」

「・・・」

「俺は先生の幸せを奪ったやつが許せないんだ。絶対に捕まえない」

「・・・はあ・・・」

「悠、溜息つくなよー」

「危険かもしれないぞ?」

「わかつてる」

「本当に?」

「わかつてるよ、それでも俺は犯人を許せない」

「・・・わかったよ」

「悠!」

悠の言葉に明は満足する。

「でも」

「何?」

「無茶はするなよ、気が済むまで手伝ってやるよ」

「ありがとう!」

明はただ、純粹に協力者ができたことに喜んだ。

協力者の気持ちなんか知らずに。

本格的な捜査は明日からということになって帰路についた。

明とそして一緒に帰っていた美帆とも途中でわかれると、悠は一人

真剣な顔をして歩いていた。

「はあ・・・」

大きく息を吐いた。

悠の頭の中ではさつきまで会話がめぐっていた。

「犯人・・・見つかるわけないじゃん」

深雪の立っていた教壇を思い出す。そして・・・突き落とす瞬間も。

「高所恐怖症なんてデータになかったぞ」

さつき明に言われるまでそんなこと知らなかった。組織から送られてくる資料にもそんな記載は一切なかったのだ。

「しまったなあ・・・」

ぶつぶつと呟いていた。

「何が？」

曲がり角を曲がった瞬間に声を掛けられていた。

「何でもないですよ」

「・・・そうか」

サラリーマン風の男が角を曲がると待っていた。

「それより仕事だ、ツキ」

「・・・」

差し出してきた封筒を悠・・・ツキは黙って受け取った。

「この前の女教師の婚約者」

男は淡々と言う。

「やはり女教師が喋ったようだ。運よくまだ警察には知られていな

いが・・・」

「・・・」

「殺せ」

「・・・はい」

詳細は封筒の中身を読み、とだけ言うと男はどこにでもいるサラリーマンのように町中に消えていった。

悠は・・・ツキはそのまま婚約者の家に向かった。

「こんにちは」

「・・・深雪の高校の・・・」

「教え子です」

泣きはらした目をする婚約者に一生徒として話しかけた。

「ま、今日はそんな用事じゃないんですけどね」  
「え？」

ツキは手袋をつけ、ロープを準備していた。

「先生から何か余計なことをきいてますよね」  
ロープをピンとはった。

「君・・・？」

「死んでください」

「！！！！」

気づいたのか逃げようとした。

「暴れないでくださいよ」

「な・・・きみ・・・は！！！！」

いつの間にかうつぶせに上から押さえつけられていた。

「深雪を・・・殺したのは・・・お前か！！」

「ええ、口止めたのにあなたに話しちゃうから」

「！！！！」

「おしゃべりはここまでです、よかったですね、もうすぐ先生に会えますよ」

ツキはロープを首にかけると一瞬で勢いよく引いた。

「っ。・・・」

動かなくなった。

「さて・・・と」

自殺に見えるように工作をするとツキはその場を後にした。



## 2人の思い

翌日

早速、婚約者の死はニュースになっていた。

「悠！ ニューズ見たか！？」

朝のニュースで見たのか、明は登校するなり悠に話しかけた。

「見たよ。先生の婚約者だったよな」

うん、と明は頷く。

「先生の後追い自殺・・・って見解だよな」

事件は自殺で処理されようとしていた。

「ああ、でも・・・あの人そんなに弱い人じゃなかったと思うんだよ・

」

「俺会ったことないからわからないけど・・・やっぱり先生いなくなつて生きる気力なくしたんじゃないかな」

「・・・」

明はどこか納得できないという顔をしていた。

「悠、もしもさ・・・婚約者さんが深雪先生の犯人知ってたらどうなるのかな」

「え？」

悠は明を見た。

「口封じ・・・」

「！」

「なんてことあるのかな」

「・・・さあ・・・」

悠は平静を装って言った。

「あるかもしれないな。でも、婚約者さんが犯人を知ってるかは考えにくくないか？学校で先生亡くなったんだし」

「じゃあ、見当がついていた、とか」

「なるほどな」

「それを犯人に知られて自殺に見せかけて殺されたっていうのはどうだ？」

「確かに、あり得くはないけど、日本の警察だって馬鹿じゃないぜ。首つりだろ？自殺か他殺くらいの見分けくらいつくんじゃないのか？」

悠は少し話題を変えるように言うが、明は他殺の線を重視しているようだった。

「すっごいうまく作ればできるんじゃないのか？ほら、サスペンスとかでやってるじゃん」

「・・・お前、好きだよな。サスペンスとかミステリー・・・」

「おう」

そう話がそれたところでチャイムがなり、ホームルームが始まった。

授業中2人は別々のことを考えていた。

明はどうやって犯人を見つけ出すか。

悠はどうやって明をあきらめさせるか、もしくは学校以外に目を向けさせるか。

しかし、どうしても明は校内に犯人がいると思っていた。

根拠はなく、ただの直感で。

悠としては、確かに内部犯の確率は高くなるとは思っているが決して外部犯でも不可能とは言えないと思っていた。

何しろ今まで他の学校で似たような事件を起こしたこともあるくらいだからだ。

明の絶対に内部犯という意識を変えさせる、あきらめさせるといふのは本当に困難なことだろうと思いつつも悠はふっと口を歪ませた。自殺に見せかけて、自殺で処理されたのにもかかわらず自分を探そうとしている人はこれまでいなかったからだ。

でも、きつと明はあきらめるだろうと楽観的に考えていた。

今までも何人も、何十人も殺してきた彼は一度として捕まったこと

も見つかつたこともないのだから。  
ところが明はそれ以上に犯人探しに燃えていることをまだ悠は気づいていなかった。

## 目撃情報

放課後になると明の計画で犯人探しが始まった。

「とりあえず、先生を恨んでいる人とあの時間に屋上の近くにいた人を探そう」

「わかった」

「仕方ないわね」

犯人探しの協力者として明の幼馴染みの美帆も呼ばれていた。

最初はクラスの皆一人ひとりに聞くことになった。

「あの日、屋上につながる階段か4階で誰か見てないか？」

校舎は4階建てで立ち入り禁止にはなっているが簡単に屋上近くには行けるのだ。

「しらねーよ。ってか、3年生に聞いた方が早くねーか？」

1階は自習室や空き教室、2階が1年、3階2年、4階3年という構造になっていた。

「でもさー、ほら一応？」

クラスメイトのアドバイスを聞くも一応続けるようだ。

「じゃあ、先生恨んでた人知らない？」

「恨んでた人・・・なあ・・・あ」

「あいつはー？」

近くにいたクラスメイトも言った。

「あいつ？」

悠が聞き返した。

「ほら、石島先生。ふられたって噂してたじゃん」

「そっか。ありがと」

明がお礼をいって他のクラスメイトに続けた。

そして結局下校時間になるまで続けた。

「ほら、そろそろ帰るよ」

美帆が言つと明が最後に1つだけと頼んできた。

「何？」

「屋上見に行こう」

「もう遅いよ？」

「いいから！」

仕方なく美帆も悠もそれにつきあった。

「それで・・・屋上ってどっち？」

「こつち」

悠が答えた。

「え？悠知ってるのか？」

「学校の地図くらい頭に入れておけよ」

「あー・・・」

文句言われて沈む明を放置して悠はさつさと歩いた。

目的は明より先につくため。見落しがないか気になったのだ。

「警察に現場検証されたあとだから大丈夫だろうけど・・・」

「？狩谷君何か言つた？」

横から美帆が悠を覗き込んでいた。

「・・・屋上行ったことないなって思つてね」

そついつて前を向いた。

そこにはすでに屋上の扉があつた。

「おいて行くなよー、なあ！」

後ろに明が追い付いてきていた。

「あ、ここが屋上？」

悠を押しつけていた。鍵がかかっているため外に出ることはできないためドアノブを壊しそうなほどに握りしめた。

「明・・・お前なあ・・・」

ころころ気分の変わる明を呆れた目で見ていた。

「ここで・・・先生と誰かが・・・」

今度は静かになった。

「先生こんな寂しいところに立ってたんだ・・・」

日が暮れた夜の屋上はボロボロのコンクリートと所々に生えた雑草をさびしそくに演出していた。

「ここに呼び出されて・・・何を思ったのかな・・・」

明はつぶやく。

「さあ・・・」

「でも・・・幸せではないよね・・・」

悠と美帆がそう答えた。

「そこに誰がいるのか!？」

急に下から大声がした。

「!?!」

「う・・・」

「やば・・・」

そして大きな足音が登って来た。

「こんなところで何をしてるんだ?クラスは?」

教頭だった。

「すみません」

「でも・・・俺ら深雪先生のことを信じられなくて!!」

明が一生懸命弁明していた。

「わかった。でも、もう遅い。さっさと帰りなさい」

「はい・・・」

教頭に従いおとなしく3人は階段を降りようとしたところで、明が振り向いて聞いた。

「先生はいつも見回りしているんですか?」

「そうだよ」

「あの事件の日も?」

「あの日は悲鳴が聞こえて急いで降りて行ったから、ここまできていないんだ」

「そうですね・・・。一応聞きますが、誰かみませんでしたか?」

「誰か・・・かあ。まだ3年生が数人残っていたけど・・・ああ、石島

先生も急いで降りて行ったな」

と思いついていた。

「明日、石島先生をあたってみようか」

帰りながら悠は明に言った。

「そうだな、動機ある人つてのもあるし」

こうやって初めて手掛かりらしいものを手に入れて明は勢いをつけていた。

## 味方が敵か

翌日、さっそく明は石島に会いに行った。

「俺が斎藤先生を殺したと思っっているのか？」

石島は簡単に察したようだ。

しかし、その後明は思い切り説教をつけてから解放されたのだった。

「明、単刀直入に言いすぎよ」

美帆が少し離れたところで待っていた。

「せめて、狩谷君と一緒に行けばいいのに」

「あいつ、今日風邪で休みなんだよ・・・」

だから一人で石島の所にのりこんだという。

「そっか。結構体弱いよね、狩谷君」

「そうなんだよ、昨日まで元気だったくせに」

そうため息を明はついていた。

一方、

「はつくしゅん」

とくしゃみをしている悠は遠く離れた町にいた。

「んんー」

「風邪か？」

「噂でしょう・・・たぶん」

鼻を押さえながら明のことを思い出していた。

「噂・・・ねえ」

隣の黒服の男がじつと悠をみた。

「何ですか？」

「女教師を殺した犯人を探している、という噂があるのだが？」

「！」

「なにそんな馬鹿なことをしているんだ」



「遊びですよ」

「・・・遊びならいい。しかし、本気になる前にやめさせる」

「わかってますよ」

それはうすうす悠も感じていることだった。

「だったらこんなところ連れてこないでください」

今日は石島に会いに行く予定だったのだから。

あの日、屋上をでてすぐに石島をみかけていたのだから。他の生徒の悲鳴によって姿はみられていないが、确实だとは言い切れない。妙なことを言わないか少し心配だった。

「そういうな。働け」

「はいはい」

そして悠は視線を前に戻し、ライフルを構えるのだった。

悠が登校してきたのはそれから2日後だった。

「おはよう、もう風邪大丈夫か？」

「大丈夫、すまん」

「いって」

「石島先生には話を聞きに行ったのか？」

「行ったよ、空振りだ。また一からやり直しだぜ！」

明は諦めていなかった。

その様子を見て悠も決心していた。

石島以外の情報は何もなかった日にちだけが過ぎて行った。

「吉川さんも大変だね」

今日は美帆と悠が2人で手掛かりを集めていた。明は追試の真つ最中だ。

「狩谷君も同じでしょ」

諦めたような顔をしていた。

「あはは、それにしても・・・明って粘るな、この犯人探し」

「本当に明、先生のこと大好きだったからね」

2人は深雪の落下地点のそばにきていた。

「ここで・・深雪先生」

「うん。まだ、血のあと残ってるな」

「・・・そうだね」

「狩谷君、あの日人だからの中にいたよね？」

「下校しようと思ったたら悲鳴聞こえてさ、思わず駆け寄ってた」

「・・・そうだよ・・ね」

「何？」

美帆は悠から一歩離れて、恐る恐る口を開いた。

「本当に・・？」

「本当だよ」

実際は、突き落としした後、人に見つからないように急いで降りてきたところで群衆の中に入ったのだが。

「明に・・話してないこととか、黙ってることとかない・・？」

「え？」

「だって、何か知ってそうなのに・・何も言わないし・・、この犯人探しやめさせようとしてる感じがするから・・」

「・・・」

正直、悠は驚いていた。明ではなく美帆に言われたことに。

そんなに接している回数は多くないのだ。

「そりゃ、危ないからだよ。真犯人がいたとして、ばれて殺されるとかなったら嫌じゃん」

「そうだけど」

「それに、婚約者さんも死んでるんだ。俺としては別に深雪先生に想い入れないからいつだってこの犯人探しやめてもいいって思ってる。他の生徒だってそうだ。俺達以外にも犯人探そうと躍起になってる生徒いたみたいだけど、もうあきらめてるよ。あれから・・1か月もたってるんだから」

「!!--」

「俺は死んだ人より、生きてる人を心配してるだけ。悪い？」

「・・・え・・・と・・・悪くない・・・です・・・」

弱々しく答える美帆をみて悠は我に返った。

「あ・・・ごめん。言い過ぎた・・・」

「うん、狩谷君の言うことは正しいよ」

でも決して美帆は悠と目を合わせない。

「明がしてるのは無謀なことだって・・・本人もわかっていると思う・・・」

「・・・」

「あのさ・・・1つだけ・・・正直に答えてほしい」

「何？」

「狩谷君は明の味方・・・だよな？」

ようやく顔を上げ目を合わせた。

その目は泣きそうで、恐れていたけれども・・・真剣だった。

「・・・そうでありたいと思うよ」

美帆を目の前にして、断言した答えを出すことを悠はできなかった。

夜、悠のアパートに黒服の男が訪れた。

「ツキ、何をしているんだ？」

「え？」

高校の宿題をしていた。

「宿題ですよ」

「そうじゃない」

男はバンと手を宿題の上においた。

「高校で何をしているかと聞いているんだ。この前の話を忘れたのか？」

「・・・」

悠は、じっと男をにらみ返した。

「これ以上は許されないぞ」

明の行動はずっとおさまることにはなかった。どれだけ悠が止めようとしても。

「お前がすることはわかってるな」

限界に近付いているのは悠にもわかっていた。それを見越しての命令だった。

「はい」

「それならいい」

そして、男は何事もなかったかのように手をどけると次の仕事について話し始めていた。

## 疑惑

身の周りでは起きなくても日常的に殺人事件はどこかでおきているものだ。

「あ」

明の家に遊びに来ていた美帆はついていたテレビのニュースに目を止めた。

「どうした？」

「これ……」

「殺人事件か。隣町？」

「そう」

昨日、隣町で殺人事件が起きたというものだった。

「犯人は交際の男。犯人わかってるじゃん」

明はいまだに深雪を殺した犯人を見つけられないことと重なっていた。

「犯人わかってるんだ……」

「これがどうかしたのか？」

美帆の様子がおかしいことには気がついた。

「昨日……隣町の駅で狩谷くんを見たの」

「悠を？」

「うん……」

美帆は拳をギュッと握りしめた。

「いつもと違う人にみえた……」

怖々と口を開いた。

「もしかして、この事件の犯人とか思ってるのか？」

犯人は交際の男だろ？と不思議そうな顔をした。

「でも、捕まってるじゃない！」

握りしめた手は震えていた。

「何で悠だと思うんだ？ただの高校生だろ」

「ただの高校生ならこんな心配しないよ」

「え？」

「真つ黒な格好で、暗くて、何も見えてない感じで・・・」

「は？暗いって、それこそ逆だろ」

明からみる悠の姿は一般の高校生男児だった。

「それは明の前だけだよ！！」

「え？」

「狩谷君、たまにすごい怖く感じるの」

「何で？」

その時は、美帆の言う悠の姿を想像できなかった。

翌日、明は早速悠に尋ねていた。

「悠、一昨日隣町にいた？」

「は？」

「一昨日なにしていた？」

悠はじつと明をみた。

「・・・家にいたよ」

「そうか」

明はそれ以上聞かずにこの話題を終えようとしていた。

しかし、悠は終わらせなかった。

「いきなりなんでそんなことを聞くんだった？」

「美帆がさ、隣町の駅でお前そっくりの人を見たって言うから」

「ふーん」

「でも、出かけてないなら人違いだな」

「俺そっくりの人ねえ」

「そうそう、なんか暗くて怖かったって。一昨日、ちょうど隣町で

殺人事件起きてたみたいでさ」

「なんだそりゃ、まさか俺が犯人ってか？」

驚いたように明をみた。

「犯人はわかってるよ。まあ・・・それが本当ならな」

冗談っぽく笑いながら明は答え、悠も笑ってみていた。

「え！？狩谷君に言ったの!？」

犯人探しを終えた帰り道はいつものように明と美帆は一緒だった。

「うん」

「何で!！」

「でも、ずっと家にいたってさ」

「そんなの本当かどうかわからないじゃない」

美帆の足が止まった。

「美帆？」

一歩前に出たところで明は振り返って美帆をみた。

「心配してるんだよ？」

美帆はうつむいて今にも泣きそうな声で言った。

「狩谷君、明に言っていないことあるよ？隠してることあるよ？」

「そりゃ、一つや二つ隠し事くらいあるだろ」

「深雪先生の事件のことでも？」

「!！」

深雪の名前がそこで出てくるとは思っていなかった。

「どづいっことだ？」

「深雪先生の事件のあった日、狩谷君はあの校舎の4階にいたんだ

よ」

「え・・・？」

「やっぱり聞いてないんだ」

ため息をついた。

「だからおかしいっていつてるの。明が必死に探してるの知ってて隠してるんだよ？こんな大事なこと・・・」

「悠を疑ってるのか!？」

「・・・うん・・・、一昨日だって殺人事件のあった町にいたし、他にも事件のあったところの近くで見かけたこともあったの・・・」

ずっと前のことらしい。偶然通りかかったと言っていたので気にしていなかったが最近どうしてもそのことが気になり始めた。

「でも・・・」

「わかってる！これだけで犯人とか決めつけられないことらい。だけれど・・・、私は明が心配なの」

美帆は力強い目で明を見詰めた。

「たまに冷たい目で明のことみてる時もあったし、何より感情があるように見えない」

「感情・・・」

「作ってるって感じがしてたまらないのよ。狩谷君が怖いの!!」  
あまりにも真剣な顔で言われて明はたじろいでいた。

「お願い・・・狩谷君には気をつけて・・・」

美帆の言葉に明は何も反応ができなかった。

美帆と明から少し離れたところに黒服の男が立っていた。

「ツキ」

黒服の男の陰に隠れるように悠も潜んでいた。

「仕事だ」

悠は小さく

「はい」

と答えた。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7295q/>

---

犯人は・・・

2011年10月12日15時49分発行